

インドとヘブライとの狭間で

——フリードリヒ・シュレーゲルの《言語起源論》——

酒 田 健 一

「生成する宇宙，すなわち自然以外にいかなる宇宙もない」¹⁾のだから，生成が「世界の本質」，「世界の起源」²⁾であり，「一切はただ一つの生成」という「永遠の生成」³⁾の概念が世界探索の唯一の導きの糸である。「世界は体系ではなく歴史」⁴⁾であり，歴史が「唯一の学問」⁵⁾，「最も普遍的かつ最高の学問」⁶⁾である。だがこの「永遠の生成」の始まりと終わりは「神秘的かつ超自然的」⁷⁾なもの，自然，すなわち宇宙であることを絶したもので，それゆえ一切の生成の《彼岸》であるところのものによって規定され，かつその中へ没している。歴史の両端は「根源的な啓示と最も密接な関係に立つ」⁸⁾超越的・超歴史的発端と終末としてあらゆる歴史的遡及と展望の糸を断ち切る認識の深淵である。「何よりも空虚な無と必然性の中へ迷い込むまいとすれば，世界の発端を越えてゆくことは許されない。」⁹⁾——「体系をもつことも体系をもたないことも，ひとしく精神にとって致命的である」というパラドックスとして鋭く自覚され，「それゆえ精神はこの二つながらを結合すべく決意しなければならないだろう」¹⁰⁾という課題を背負い込んで以来の，これがフリードリヒ・シュレーゲルの思想世界をそのあらゆる局面において分断する永遠の二律背反，歴史性と超歴史性，非体系性と体系性との相剋である。後期三講義の一つ，1828年の『歴史の哲学』の序文において彼は，「全人類がその失われた神の似姿を幾世代にもわたる恩寵の段階に応じて取り戻してゆく過程」¹¹⁾の追跡という超歴史的課題をもって歴史哲学の究極目的としながらも，なおかつ実証的歴史記述者であることを貫こうとする。「私は，いついかなるときも歴史的伝承を跡づけること，その証言や報告の多くがわれわれにとって異様に思われ，あるいはほとんど解明し難いもの，少なくとも謎めいたものでありつづけるような場合でさえも，

1) PL (Philosophische Lehrjahre) III-412. KA (Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe, hg. v. Ernst Behler unter Mitwirkung v. Jean-Jacques Anstett u. Hans Eichner. München, Paderborn, Wien, 1958ff.) XVIII, S. 157.

2) PL IV-1041. KA XVIII, S. 282.

3) Die Entwicklung der Philosophie. KA XII, S. 410.

4) Ebd., S. 418.

5) Ebd., S. 420.

6) Die Vorlesungen über Universalgeschichte. KA XIV, S. 3.

7) Die Entwicklung der Philosophie. KA XIII, S. 34.

8) Die Vorlesungen über Universalgeschichte. KA XIV, S. 27.

9) Die Entwicklung der Philosophie. KA XII, S. 475.

10) AF (Athenäums-Fragmente) 53. KA II, S. 173.

11) Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 5.

この追跡の糸を握りしめていることを不変の原則としてきた。なぜなら古代世界とその歴史のただ中でこのアリアドネの糸を手放すやいなや、恣意的に捏造された諸体系の迷路、種々雑多な意見のカオスからのいかなる出口も見出せなくなるからである。¹²⁾だがシュレーゲルが握りしめていると信じていたこの歴史の糸の一端は歴史の向こう側へ消えている。こうしてわれわれはシュレーゲル最後のパラドックス、歴史の実証と神学的思弁の癒着と葛藤の「カオス」、《言語起源論》の「迷路」の中をシュレーゲルと共に彷徨うこととなる。出口はむろんない。

1

「一切は、一切は例外なくインドに由来している。」——シュレーゲルがサンスクリットの学習に没頭していた1803年にパリから友人ティーク宛に書き送ったこの熱狂的な言葉¹³⁾は、しかしこの時期すでにもう一つの同様に熱狂的な言葉を暗黙の道連れとしている。《一切は、一切は例外なくモーセの啓示に規定されている》というのがそれである。暗黙のというのは、この時期、すなわち1803年から翌年にかけてのパリ私講義『ヨーロッパ文学の歴史』においてすでに、インド神話の主神ブラフマーをこの多神的世界の「父」なる唯一至高の支配者として位置づけると共に、このブラフマーにヴィシュヌとシヴァの両神を加えた「三神一体像」に「三位一体」の理念を投射することによって、インド神話の原質をカトリック・キリスト教的原啓示の最古の顕現として捉えていた¹⁴⁾シュレーゲルにとって、このモーセへの信条告白は自明の前提と言えただろうからである。この意味で——というのはカトリックへの《回心》へ踏み切ろうとしていた当時のヨーロッパ知識人に他のいかなる態度表明の可能性があり得ただろうかという意味において——シュレーゲルのサンスクリット研究の最初の成果である幾つかの翻訳断片のうちに「明白なキリスト教的・人文主義的傾向」を見て取り、この傾向を、1805年から1823年までの間に書き継がれてゆく六冊の『東洋学研究ノート』に一貫して認められる「ライトモティーフ的思想の糸」¹⁵⁾であるとした上で、古代東方の秘儀や神秘思想へのシュレーゲルの関心をその中心において規定していたのは「モーセの啓示」にほかならないとする¹⁶⁾ウルズラ・シュトゥルク=オッペンベルクの総括に異論の余地はない。事実、カトリックへの《回心》と同年の1808年に刊行されるシュレーゲルのインド讃歌『インド人の言語と叡知』がいわば《ヘブライ人の

12) Ebd., S. 24.

13) Ludwig Tieck und die Brüder Schlegel, hg. von H. Lüdeke. Frankfurt a.M. 1930. S. 140.

14) Geschichte der europäischen Literatur. KA XI, S. 24. 三神一体像と三位一体とのこの符合については、後期三講義の一つ『歴史の哲学』(1828)ではより慎重な姿勢と表現が目立つようになる。なおパリ私講義ではインド三神の名は挙げられていない。この点に関しては、Orientalische Gedanken 1805 [I-88]. Vorlesungen und Fragmente zur Literatur, erster Teil, Orientalia. KA XV-1, S. 17f. / Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 99.

15) Orientalia. KA XV-1, S. IX.

16) Ebd., S. XXXVIII.

言語と叡知》へと折り重なってゆく過程は、オリエントおよびインド研究一般の意義と価値を論じた同書第三部第四章でのシュレーゲル自身の総括によって明白に予告されている。彼は『旧約聖書』をもってヨーロッパ世界と古代オリエント世界とを結合する「紐帯」と位置づけ、その論拠を『モーセ書』とインド神話とに見出される共通の根源的啓示——すなわち前者においては「神の似姿」として造られた人間の「自己自身の罪科」による樂園の「至福と純粋な光」の喪失ののち、後者においては「神的認識の純朴さ」の喪失ののち、そのいずれにも到来して世を覆い尽くす「罪と迷信の夜」と「人間精神が絶えず捏造する誤謬と妄想」とを貫いて、あの「根源的な光」の「痕跡」が摂理によって救出され保持されるという啓示——に求め、オリエントおよびインドの最古の哲学の歴史を『旧約聖書』の「最も美しい、最も有益な外的注釈」と見なすのである¹⁷⁾。

このユダヤ・キリスト教的教義への傾倒は、『回心後』の1812年のウィーン講義『古代・近代文学の歴史』に到ってさらに濃密化し、その第四講においてシュレーゲルはモーセの伝承とキリストの告知とを「人間精神の全歴史の中心」に据え¹⁸⁾、他のすべてのアジア民族に対するヘブライ人の優位性を、「この民族に預託された真理と高次の認識」を自分たちには「封印されたままの財宝」として「盲目的な服従と信仰」のうちに純粋に保全して後世に伝えたという一事に求め、他方、他のアジア諸民族のもとでは同じこの預託がまったく知られぬままに消滅するか、粗野な詩的虚構や「身の毛もよだつ誤謬」によって歪曲されてゆく運命にあったと断定する¹⁹⁾。このヘブライ中心主義は、ジャン＝ジャック・アンステットの指摘²⁰⁾を待つまでもなく、例えば「モーセなくしてはすべてのオリエントの知識は、神の精神がその上を漂っていない太古の原水にすぎない」という同時期の断章²¹⁾を経て、同講義への十年後の加筆部分（シュレーゲル自選のいわゆるウィーン全集版第一巻、1822年）、すなわちその「最内奥の精神」において「太古の世界の特徴」を完全にとどめている『創世記』に「人間の大きい秘密」を告げる「旧約の福音」が、そして「一切の啓示」を解明し「太古の世界の象形文字」を解説する鍵が見出されるとする記述²²⁾によって補強され、さらに1828年のウィーン講義『歴史の哲学』に到って、「古代の異教世界がそ

17) Über die Sprache und Weisheit der Indier. KA VIII, S. 295f.

因みに1823年の研究ノート『オリエンタリア』には『インド論の改訂版のために』と題する、明らかにこの1808年の著作の加筆ないし補説を念頭に置いた次のような覚書が見出される。「改訂版では神エホバ、あるいはモーセの啓示——インドの原初世界解明のためのモーセの啓示の鍵について、という特別の一篇が加えられることになろう。（モーセの啓示との関係において、あるいはまたモーセの啓示の立場から。）

この稿の各章は大要以下のようになろう。——神エホバ——アダムとエヴァ——カイン——セツとエノク——ノア——セムとメルキセデク——おおよそケトラの子供たちに到るまで。カナン人以前にパレスティナに住んでいたエナクの子孫。」(KA XV-1, S. 116.)

18) Geschichte der alten und neuen Literatur. KA VI, S. 98.

19) Ebd., S. 100.

20) Jean-Jacques Anstett: Mystisches und Okkultistisches in Friedrich Schlegels spätem Denken und Glauben. In: Z.f. Deutsche Philologie, 1969, S. 134f.

21) PL Beil. X-59. KA XIX, S. 302.

22) Geschichte der alten und neuen Literatur. KA VI, S. 104.

の最も洗練された文化民族のもとにおいてさえも墮落し、迷い込んだ混乱の深淵」が一層酷烈の様相を帯びるに及んで「ヘブライ民族本来の使命と精神的方向」が真に用意されたとする記述²³⁾によっていわば最終的確認を得るかに見える。

一切が「例外なく」そこに淵源していると思われたインド世界を「旧約の福音」を介してキリスト教的ヨーロッパ世界へ直結ないし直属させようとするシュレーゲルの、明らかにヘブライ原理によるインド原理の包摂を意味するこの構図は、しかしある決定的な点において頑強な抵抗に遭遇する。そのインド論の表題からしてシュレーゲルの避けては通れない言語問題、特に《原言語》ないし《言語起源》が当面の課題となるとき、インド原理がヘブライ原理への従属を拒むからである。サンスクリットとそれに連なる大語族、いわゆるインド・ヨーロッパ諸語——その「共通の母胎」をこの時期シュレーゲルはサンスクリット以外に想定することができない²⁴⁾——は、ヘブライ語を同族とは認めない。この拒絶は、例えば「カイン一族とセツ一族との抗争は、インドにおいてバラモン教徒と仏教徒との相剋のうちにいわば継承される。だが両教徒は互いに非常に多くのものを受け入れ合っており、そこでは多くの混合が明瞭に見て取れる。しかしこの混合でさえすでに聖書の中で暗示されている」²⁵⁾といった類の、インド世界とヘブライ世界との統合を意図したシュレーゲル特有の《結合術的》思弁を断然排除する実証的領域のいわば生体反応であり、これに抗するすべのないことをシュレーゲル自身充分に承知している。にもかかわらずヘブライ原理はカトリック思想家シュレーゲルに『創世記』の《民族系統図》に基づくセム系上位の言語体系の構築を迫り、ヘブライ語を頂点にインド・ヨーロッパ諸語およびその他の言語をその下層に位置づける《言語ピラミッド》を構想させる。こうして彼は原言語ないし言語起源に関する最終答案を二通作成せざるを得ないという苦境に追い込まれ、1827年から1829年にかけての一連の公開講義の前記『歴史の哲学』においてはこの超歴史的《言語ピラミッド論》²⁶⁾を、これに続く未完のドレースデン講義『言語と言葉の哲学』においてはインド・ヨーロッパ諸語を基軸とする歴史的《言語起源論》²⁷⁾を、原理的に共存不可能な両仮説として置き捨てにすることとなる。インド原理とヘブライ原理との「紐帯」は言語論において断ち切られる。その痛恨を彼はほかならぬ《言語ピラミッド論》の一隅で将来への儚い希望に託して告白せざるを得ない。「ヘブライ語について言えば、研究が深く徹底したものになれば、それはインド・ギリシャ語族とさほど隔たったものではなく、部分的には類縁的でさえあると私は信じている。たとえこの類縁性が構造の相違やまったく異質な文法組織のために一見識別できないまでに覆い隠されているとしてもである。」²⁸⁾

23) Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 148.

24) Über die Sprache und Weisheit der Indier. KA VIII, S. 114f.

25) Fragmente zur Geschichte und Politik III. KA XXII, S. 376.

26) Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 139ff.

Fragmente zur Geschichte und Politik III. KA XXII, S. 390f.

27) Philosophie der Sprache und des Wortes. KA X, S. 359ff.

28) Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 142.

マンシュウ〔満洲〕語辞典に眼を通してみよ。その「擬声語」の過剰に驚かされるはずだ。『インド人の言語と叡知』第一部第五章『諸言語の起源について』は、この意表を衝く書き出しで始まる。マンシュウ語は概してこの種の単語で成り立っている。しかしこうした「擬声語」に支配されない別系統の語族も存在する。ドイツ語がその一支族として連なる語族がそれである。むろんドイツ語にも「擬声語」は混在するが、マンシュウ語に比べれば僅少である。しかしタタール語、スラヴ語、その他の北方諸語との混成語として説明できるかもしれないベルシャ語よりも少ないとは言えない。しかしギリシャ語、ラテン語となるとその数は激減し、さらにインド語（サンスクリット）になると完全に姿を消す。これは何を意味するか。これら一連の諸言語に共通した特質は、この語族がマンシュウ語のように自然界の音響の模倣から出発して徐々に理性形式めいたものへと造成されてゆく自然発生的言語ではないということだ。むしろ逆にこの語族の存在が人間の根源的叡知性、すなわち人間はかならずしも未開の動物的状態から出発して長い労苦の末に幾ばくかの理性を身につけてゆくような存在ではなく、「初めから一挙に明晰かつ真摯な思慮を与えられていた」と想定せざるを得ない存在であることを証明している。このような人間の根源的精神性の証であり所産であるのがこの一連の諸言語であり、この語族はその「最初の最も単純な構成要素において純粋な思想世界の最高の概念、いわば意識の全見取図を形象的にではなく、直接的な明白さをもって表現している」²⁹⁾と言える。

シュレーゲルは結論を急ぐ。二種類の異起源の言語が存在する。すなわち「自然音響の模倣やそれとの戯れ」、「感情の単なる叫び」等から発生し、せいぜい「指示の間投語」の域を出ない粗野な野性言語と、人間の「真摯な思慮、深い感情、精神の明晰さ」をすでに内包し、その起源において「一挙に与えられ」、その内発的な生命力の展開によってみずから成熟してゆく「生きた織物」、「無限の発展の可能性を宿した巧緻で、しかも単純な形成物」、「語根と構造ないし文法の二つながらを同時に兼ね備え」、「意味ある幾多の音節と豊穡な成育の萌芽とを含んだ有機的形体」である「根源的に美しい言語」との二種類である。そして人間言語の全歴史をシュレーゲルは、この明らかに超地上的起源に由来すると考えられる後者の言語の純粋性が自然発生的な地上的言語の混入によって奪われてゆく過程と捉え、その証左として、すでにその成立の初期の段階で諸『ヴェーダ』読解のための辞書が必要とされていたという事実や、サンスクリットがその最初期において被征服諸部族の異質な言語に侵食されていたことを示す『ラーマヤナ』の事例を挙げる。そしてこの性急な『言語起源論』の章を、「詩的熱狂や比喩の充満よりも哲学的洞察や冷静な明晰さ」によって際立つ古代インド語の根源的性格、すなわち「比喩等の感性的表現」によってではなく「第一義的な本来の意味」において基礎づけられた「高度の精神性」、「形而上学的な意味以外のいかなる意味も許容しない言語要素」への賛辞³⁰⁾をもって閉じる。

シュレーゲルはまた先の《異起源の両言語種族論》を『インド人の言語と叡知』第一部

29) Über die Sprache und Weisheit der Indier. KA VIII, S. 167ff.

30) Ebd., S. 169ff.

第四章『内部構造から見た言語の二大種族』において構造分析的に根拠づけようとする。彼は全言語を、意味の二次的諸規定を「語根音声の内的変化」、すなわち「語形変化」によって示す言語群と、それ自体で複数、過去、当為、その他のこの種の関係概念を表示する「固有の付加語」によって示す言語群とに大別し、「インド語とその派生語」のすべてを前者に、それ以外のすべての言語を後者に帰属させる。そして後者、すなわち語形変化を完全に欠き、それ自体ですでに固有の意味をもつ「不変化詞」によってすべてを処理する言語の一例として、「奇妙な単音節性」に貫かれた中国語を挙げ、この独特の単音節的性格の原因を、「極度に技巧的な文字体系」がこの言語の発展を阻害して「幼年期」段階に固定させてしまったことに求められるだろうと推定し、「その他の点ではきわめて洗練された」この民族の言語を、同型のバスク語やコプト語などと共に言語発展の最低段階に位置づけ、また、同じアジア地域に見出される「四つの互いにまったく異なる語族」、タタール、フィン、モンゴル、ツングースないしマンシュウの諸語を——日本語も含めて——この最低部類に一括する。むろんシュレーゲルは、言語の一特定種族を無条件に称揚し、その他の種族を無条件に蔑視する意図はなく、また、言語問題に快刀乱麻を絶つ判決はあり得ないと付言するのを忘れてはいない。だが彼はただちに、「アラブ語やヘブライ語の高い技巧性、品位、崇高な威力」を否定することができないように、「アメリカ原住民の諸言語が全体として低次の段階にあること」もまた否定できない³¹⁾事実であるとさらに付言することによって、先の付言をみずから葬り去っている。

このような言語二元論ないし二分法は、『インド人の言語と叡知』の刊行に先立つ1805年から翌年にかけてのケルン私講義『世界歴史』においてすでに明快かつ露骨に表明されている。シュレーゲルは言語を人類史研究の中核、「歴史の絶対者」、諸民族の系統図を見出すための原理³²⁾と定義した上で、言語一般を無造作に「神的言語」と「人間的言語」とに大別し、前者にはその類縁性によって一言語圏を形成している「高貴なアジア・ヨーロッパ諸語」（インド・ヨーロッパ諸語）を、後者にはこれらの諸語とのいかなる類似性も見出されないばかりか、相互関係すらも確定できないあの自然発生的言語群を帰属させ、このいわば神の恩寵の埒外へ追いやられ、インド・ヨーロッパ語族に属することをいわば神意によって許されず、それゆえ「歴史の絶対者」とはなり得ない土俗的諸言語を彼の《言語系統図》構想から除外する³³⁾。だがここでエジプト、ヘブライその他高度の文明を保持し得た古代諸民族の言語の処遇が宙に浮く。特にヘブライ語の処遇は、カトリックへの《回心》を数年後に控えたこの時期のシュレーゲルにとって、この選ばれた民の歴史的位置づけと共に最重要課題の一つだったはずである。しかしこの時点での彼の《歴史的思弁》の翼は、言語的にはインドとも他の周辺諸国とも無縁だと見られていたエジプトを社会制度（カースト）と文化（特にその宗教意識）の類似からインドの僧侶階級の植民地と推定し

31) Ebd., S. 153ff.

32) Die Vorlesungen über die Universalgeschichte. KA XIV, S. 6.

33) Ebd., S. 14.

——因みに彼は中国をインドの戦士階級の植民地と推定する——、次いでユダヤ人地域をエジプト人の植民地と推定することによって、ユダヤ人をシリア人、フェニキア人、カルデア人、カッパドキア人との関わりを通じて最終的に広義のアラブ系民族に帰属させた上でモーセを登場させ、この『旧約』の担い手に、「一切のエジプト的・インド的要素」を彼の「タタールの民族」のために改造し、エジプト、インドに由来する「魂の不死と輪廻の教説」やインド固有の「三位一体的神性」を排して、「父」の概念の純化に基づく「再興された根源的啓示」の宗教を確立した改革者、インド精神の克服者としての地位を与えることによって、辛うじてユダヤ世界とインド世界との連続性を確保すること以上には羽ばたかなかった³⁴⁾。シュレーゲルの言語系統図構想は依然「高貴なアジア・ヨーロッパ諸語」を主軸に回転し——「あらゆる高貴な言語はいずれも本来インド語となんらかの未開言語とから合成されたものと言えよう」³⁵⁾——、彼にとってのもう一つの「高貴」な神祕的言語であるはずのヘブライ語は依然孤立の中にある。

こうしてわれわれは『インド人の言語と叡知』の第一部第一章『インド語一般』で展開されるインド・ヨーロッパ諸語、非インド・ヨーロッパ諸語（スラブ諸語はこの時期、インド・ヨーロッパ語圏に市民権を得ていない）³⁶⁾の最初期の勢揃いに立ち会う。この勢揃いは二重の意味で不揃いである。一つは、ウィリアム・ジョーンズの1786年の《発見》から僅々二十年というインド・ヨーロッパ諸語の系統図作成における避け難い現実のそれであり、もう一つは、言語神授という絶対原理に基づく系統図そのものの二元論的不整合によるそれである。しかもこの不整合は神授の恩寵に浴し得ない《自然発生的諸言語》へのシュレーゲル自身の異常な関心によって一層混乱の様相を深める。実際、彼の東洋学雑録集ともいべき六冊の『研究ノート』は、インド、エジプト、ヘブライ、アラブ等の諸言語・諸民族の他に中国語をはじめとする東アジアの諸言語・諸民族、さらにはアメリカ原住民とその諸言語への執拗な関心——モンゴル系民族の「無髯」ないし「髯の薄さ」についての覚書³⁷⁾等を含めて——を遺憾なく伝えている。言及されている言語は優に七十を越え、また、1805年の研究ノート『オリエント考』の中で列举されている東洋語関係の文献、事典類だけでも二十種にのぼる³⁸⁾。これらの研究ノートはまさにシュレーゲルの神聖・非神聖両言語をめぐる学習と考察、思弁と幻想の坩堝、編者オッペンベルクの言葉を借りるなら、「さまざまな断章的覚書の、カオスを思わせる一見脈絡のない羅列」、「考察、疑問、抜書、参考文献・文章表示、推理、推測、証明、研究計画、歴史的資料、語彙蒐集、図表、音節・音律の図式、問題圏の構想、類比」の「明確な体系を欠いた」³⁹⁾集積ないし堆

34) Ebd., S. 31ff.

35) Orientalische Gedanken 1805 [I-24]. KA XV-1, S. 6.

36) Über die Sprache und Weisheit der Indier. KA VIII, S. 15.

37) Orientalische Gedanken 1805 [I-142]. KA XV-1, S. 23.

38) Ebd., [I-41]. S. 7f. なお『研究ノート』の編纂者オッペンベルクは索引の部でシュレーゲルが言及している文献、翻訳、辞書・事典類の一覧表を作成しているが、これらの著者、訳者、編者だけでもほぼ245名を数える。

39) Orientalia. KA XV-1, S. XI.

積である。これに避け難い情報の不足や個人的偏見に起因する憶断の数々——例えば、「チベット人やカルムック人の、そしてまた日本人の宗教、総じて仏陀の宗教とキリスト教との関係は猿と人間との関係である」⁴⁰⁾——を加えれば、『インド人の言語と叡知』に先行、平行、後続する大小700篇を越える断章群が砂塵と共に巻き起こすユーラシア大陸言語見本市の喧騒は、神聖言語と自然言語の二重構造、インド原理とヘブライ原理の二重基準による神聖言語自体の分裂、歴史的方法と超歴史的理念との相剋がもたらす不整合のすべてを呑み込んでなおかつ衰えないシュレーゲルの雑食性知識欲の凄まじさを立証するものだろう。

2

『インド人の言語と叡知』刊行の十年後の1819年、シュレーゲルはJ. G. ローデの『歴史起源論』の論評において再び原言語ないし言語起源の問題を取り上げ、ローデの提示する「単音節言語」と「複数音節言語」という一見純言語学的な分類法を自然言語対神聖言語の神学的カテゴリーに代わる序列原理として浮上させる。そして言語を「自然音模倣の擬声語」からの漸進的発展と見る自然生成論と、地上的諸言語を至高・至純の神的原言語からの脱落過程の諸相と捉える流出論的起源論のいずれにも席を置こうとするローデの姿勢を批判したのち、わが身に纏いつく一切の神学的思弁を振り捨てるかのように、歴史領域からの逸脱を戒め、超歴史的な原言語——アダムが「神の意志と導き」に従って行為していた時から、あの「災いの眠り」の中で墮落し、官能世界の罠に落ちるまでのあいだに使われていたであろう言語——を、そこへの架橋も通路の開拓も不可能な「巨大な断絶」によってわれわれから隔てられた《彼岸》の言語として対象の埒外とし、「キリスト教哲学に属する一切の事柄」と絶縁して、「単音節言語」と「複数音節言語」の区別のみを分類原理とする実証的言語研究に専念すべきであると主張する⁴¹⁾。

シュレーゲルによれば「単音節言語群」は「内的な有機的生命」を欠き、それぞれが孤立した諸言語の無機的集合体にすぎず、それゆえこの集合体が内部展開によって一層高次の組織体へ形成されることはなく、最後には「恣意的で因習的な記号言語の限りなく人工的な体系」に終る。その典型が膨大な「文字のカオス」に満ちた中国語である。これに対して「複数音節言語群」はそれぞれがその組織の最内奥の繊維にいたるまで有機的に形成されているばかりでなく、各言語相互に深く浸透し合った「語源的類縁性」によって一個の有機的全体、すなわちインド語、ラテン・ギリシャ語、多少縁遠い同系のゲルマン語、ペルシャ語、「さらに縁遠く、幾分かは異種言語でもある」アラブ語、シリア語、フェニキア語、そして全スラヴ語を含めたいわば一大連合を形成する。言葉と文字との関係におい

40) *Orientalia* 1806 [II-54]. KA XV-1, S. 41.

41) [Über J. G. Rhode: Über den Anfang unserer Geschichte und die letzte Revolution der Erde 1819]. KA VIII, S. 509f.

でも単音節言語群にあっては、「メキシコの絵文字」から「エジプトの象徴的・儀礼的な秘密文字」を経て中国語の「限りなく人工的な暗号のカオス」に到る「象形文字」が、例えば中国語におけるように、話し言葉の「名状し難いばかりの貧困と曖昧さ」に理解の手助けを提供する副次的役割しか与えられていないのに対して、複数音節言語における字母書法は、あらゆる人間音声を経緻かつ自然に個々の単純な要素へ分節する機能を具え、このような分節機能によって複数音節的な語根からの有機的言語形成を促す。このようにして内的・外的生命の発動すべての「精神的な把握」を可能ならしめるこの言語群は、基本的に外的対象の「猿真似的模倣音」や内的状態の「非随意的叫喚」でしかない単音節言語群とは異なり、語根においてすでに複数音節的である。すなわち語根そのものがすでに組織されて一つの「言葉」となっており、単に生な全体印象の奔出ではなく、力動的な内的諸要素に応じた精神的分節である。こうして母音や子音、精神的息吹やアクセントへ分解され、組織された人間音声の諸要素が自然の諸対象に多様で意味深いアナロジーをもって対応しているのであって、これこそが人間言語の「本来の奇蹟」であり、このような字母書法との緊密な内的結合の有無が、「複数音節的・有機的言語群」と「単音節的・集合的言語群」とを分かつ本質的な点なのである⁴²⁾。

「複数音節言語」に比べて「単音節言語」の概念についてのシュレーゲル自身の知識と情報の「名状し難いばかりの貧困と曖昧さ」——彼が実際に中国語その他の東アジア語を読めたかどうかの詮索はここではひとまず置く——はともかく、この分類法の実効的価値は、比較言語学的には異種言語であるはずのインド・ヨーロッパ諸語とセム系諸語を同一範疇に一括集合させることによって、神聖言語間の内部分裂ないしは神聖言語概念そのものの不整合を回避し、さらには自然言語と神聖言語という露骨な差別を一見純言語学的な区別にすり替えて隠蔽したという点にあるだろう。しかしシュレーゲルにとって両言語群の価値の位階はあくまでも自明であり、ここでの課題が「歴史的な意味」での原言語、すなわち両言語群共通の源泉としての原言語の探索であるにもかかわらず、この原言語は複数音節的・有機的言語群以外には求められないとするシュレーゲルの確信は動かない。とはいえ歴史的視点を堅持する限り、問題は、この言語群中の一特定言語をその根源言語として、すなわち「ある何らかの原郷」において「最後の自然の大崩壊後」に話されていたであろうような「共通の原母語ないし根源言語」として提示することではなく、この言語群の特質である「有機的形成の純粹性」に照らしてその構造が本来の「単純な規則性」を「最も素朴」に保持している言語を見出し、この歴史的・言語学的意味での「原言語」ないし「原母語」への接近の度合いに応じた序列を明らかにすることであり、差し当たってはサンスクリット以下のインド・ヨーロッパ諸語に「アラブ・シリア諸語」を含めたいわば《複数音節的言語群連合》内部の序列が問われることとなる⁴³⁾。だがここでの序列もまたシュレーゲルにとっては自明である。この《原言語論》が、古代エジプト、ギリシャ、ローマ、

42) Ebd., S. 510ff.

43) Ebd., S. 513ff.

インドの「自然宗教」に対するイスラム・ユダヤの「啓示的、預言的律法宗教」の優越性を帰結するローデの《原宗教論》⁴⁴⁾への共感の延長線上に展開されているとすれば尚更である。こうしてヘブライ語を頂点とする超言語学的《言語ピラミッド》構築の建材がすべて出揃う。

1828年のウィーン講義『歴史の哲学』の第六講において、「人の住む地球上に広がり、散らばった夥しい種々様々な諸言語」の「迷路」に引きずり込まれないために、この「見渡し難いカオス」を少なくとも「一つの単純な概念のもとに包括する最短の道」として構想される《言語ピラミッド》⁴⁵⁾は、「単音節言語群」を最下層に、「二音節言語群」を中間層に、「三音節言語群」を最上層に配した基本構造に無数の亜種、変種を加えた言語ヒエラルヒーである。

ピラミッドの基底を成すのは、「文法をまったく欠くか、極度に単純かつ不完全な文法構造の最も原始的な萌芽を宿している」だけの「単音節言語集団」。その典型が、「文法を一切欠く徹底した単音節言語」としてこの集団における最高の完成度を示し、しかも技巧的な書体、学問的概念の高度の発達にもかかわらず、実質は「常に単音節的である幼児語」同様の初期段階にとどまっている中国語。

この最下層の上に位置するのが、「高貴」なインド・ヨーロッパ語族。最低二音節であることから内的に可動的・生産的となった語根によって、本源的に規則的で精緻な文法的基本構造の更なる豊かな展開が約束され、その叙述的形式における詩的豊かさと多様性、さらには学問的記述における明快さが育まれる。この語族は、諸民族混合の趨勢によってケルト語ないしゲール語、フィンランド語、バスク語、スキティア語、マジヤール語、その他の古語断片等、多数の中間的雑種言語を包含する。

最高位を占めるのがセム系諸語。ヘブライ語とアラブ語とがその類縁諸方言と共にピラミッドの頂点に君臨する。これらの言語は、動詞が第一等の地位を占め、一切がそこから派生するため非常に迅速な情動と熱烈な生気の表現には適合するが、豊かな文学的展開や巧緻な文法的構築には適さず、また、語根が三音節であること、あるいは語根を原則として造り上げている三文字のいずれもが一音節と数えられるから三音節たらざるを得ないことによって単調さへの傾きをもち、詩的多様性や学問的表現の柔軟性を獲得するには到らなかったが、預言的熱狂や深い象徴的含意には最高度の適合性を示す⁴⁶⁾。

ここでシュレーゲルは、「人間の全言語体系の完璧な展望、とりわけこの体系の最内奥の根底と連関へのより深い洞察」のために最も期待される寄与として、折しも台頭しつつあった「エジプト学者たちの新しい学派」による象形文字の研究を挙げ、人間言語の「失われた源泉」、その「最古にして最内奥の核心」に肉薄しようとする者は、インド語とヘブライ語、そして最古の中国語に古代エジプト語を加えた「四つの異なる側面」から出発す

44) Ebd., S. 496.

45) Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 139.

46) Ebd., S. 140ff.

べきであると提言する⁴⁷⁾。しかしこの講義の前年の1827年の覚書の一つ『始原世界と諸言語』においてシュレーゲルはすでに、古代エジプト語を中国語と共に《言語ピラミッド》の基層を担う主要単音節言語として、アフリカ系、アジア系、アメリカ系諸言語の最下層集団を引き連れるかたちで登場させ⁴⁸⁾、さらに翌1828年の『原言語』に関する覚書においては、この両単音節基幹言語の起源を「深い魂の感情」の湧出に求め、この根源感情を「磁気的な魂の響き」と性格づけ、この響きが分散消滅したのちにもなお「原初の根源要素の余韻」として残ったのがエジプト語と中国語の「幼児期的な響き」であるとした上で、この両基層言語の「磁气的」根源音上に、インド語の「星辰的・形象的・精神的の充溢〔精神的直観の星辰的・形象的の充溢〕」と、ヘブライ語の「魔術的作用部分における神の〈成れよ〉」とを各言語段階固有の語根の音節数に応じた中声部、上声部として鳴り響かせることによって、《言語ピラミッド》に独特の音響的色彩を与えている。そしてこのいわば三和音的音響空間を構成する基幹四語を、彼はさらに《エデンの源流》に発する地上の四つの支流に擬して、「現存する諸言語中、インド語(その語族中の最古の言語として)、ヘブライ語、エジプト語、そして中国語(最古の碑銘が現存するところとして)が、失われた原言語の覆い隠された源泉に最も近く位置する四つの大河と見なせるだろう」⁴⁹⁾と述べる。この四語三層構造はまた別の覚書において、エジプト語・中国語の「磁气的言語」——ただし中国語は初期の段階で「魔術的方向」を取り、やがてアメリカ原住民の言語その他の混乱した無数の最下層諸言語となって砕け散ってゆくのだが——、インド語の「巧緻で詩的な悟性言語」、ヘブライ語の「預言的(翼ある生命に満ちた)熱狂的な権威の言語」という「最古の言語創出の三段階」、あるいは「文法的原始岩層形成の三種類ないし三様式」として描かれている⁵⁰⁾。

ベラーが「神秘的實在論ないし實在論的神秘主義」⁵¹⁾として、アンステットが「キリスト教的神秘学」⁵²⁾として総括している後期シュレーゲルの、とりわけ言語論に認められるこの種の秘儀的思弁と秘法伝授的筆法はしかし、上記の講義や覚書に先立つ1823年の『東洋学研究ノート』中の『原言語』と題された一断章においてすでに全開している。——「エジプト語は最高度の蓋然性をもって磁気的な魂の言語と言えものであり、そこでは憂愁に満ちた嘆きの音調が支配的だった。(エジプト語には憂愁に満ちた磁気的な魂の深さが支配しているように私には思われる。)インド語は神話的な、それゆえ最高度に詩的な構造をもち、巧緻に組織された言語、歌と光へと美化されたインド的要素と形態の言語である。それはインドの天国の言語である。——ヘブライ語は神秘的ないし実践的精神の言語、

47) Ebd., S. 143f.

48) Fragmente zur Geschichte und Politik III. KA XXII, S. 390f.

49) Ebd., S. 407f.

50) Ebd., S. 428.

51) Ernst Behler: Der Wendepunkt Friedrich Schlegels. In: Philosophisches Jahrbuch, 1956, S. 249.

52) Jean-Jacques Anstett: Mystisches und Okkultistisches in Friedrich Schlegels spätem Denken und Glauben. S. 144ff.

霊たちの言語である。語根の三文字に見られる三数支配は、少なくともヘブライ語の規則としてもきわめて重要である。——語根に関してこれら三つの原言語のもとでは 270 と 210、そして再び 330 という数の地球的な基礎関係が支配的である。そしてこの最後の数がヘブライ語の対応数でなければならないだろう。——ここにも単音節語根、二音節語根（インド語においてはそのすべてがそうであると私は信じている）、そして三音節語根（これがヘブライ語においては少なくとも通則である）が認められる。」⁵³⁾

この種の幻想的思弁に対して歴史家シュレーゲルは一応の抵抗を試みる。——「神によって造られた最初の人間」の言語、「神みずから人間に教えた」言語、「神が他の一切の被造物と眼に見える全世界に対する支配権ともども人間に委ねた」言語がヘブライ語でもインド語でも、その他なんらかの既知の言語でもないことは、あの「四本の大河」の源流である樂園の「失われた泉」を「地理的に跡づけ、その湧出口を再び開けること」ができないのと同じである⁵⁴⁾。——「古代の異教世界がいよいよ深く墮落し、自己を見失っていった」とき、あの根源への復帰としての未来、あの「光輝く未来への帰還」の教説を通じて後代の「キリスト教への一貫した象徴的關係」を保持するという固有の使命がヘブライ民族に人間精神史の最初期における特殊な地位を与えた⁵⁵⁾とはいえ、また、その歴史観によって最古の時代の諸民族史および歴史哲学と深く関わったヘブライ民族の言語に神の啓示が託されることとなったとはいえ、ヘブライ語を全人間言語の源泉と見なす必要も根拠もないのは、モーセの《民族系統図》が一般世界歴史の基礎として使えないのと同じである⁵⁶⁾。——実証的歴史の領域に留まろうとするシュレーゲルのこうした抵抗も結局は虚しい。『歴史の哲学』第四講においてセツ系とカイン系との対立およびこの両種族の相互關係に全古代世界、全古代諸民族の歴史を解明する鍵を見出すと信じ、しかも「ノアの大洪水による一時的な暴力的中断」以後における「太古への記憶の再生」と共に「かつて両原種族の対立によって生じたのと類似の諸状況」が反復形成され、「人類の墮落の進行」と共に「一切がますます歪曲され、無秩序に陥り、ついには跡形もなく潰え去ってゆく」こととなる歴史の全過程を、まさに「本源的關係への帰還」の過程として追跡することに歴史哲学の真の課題を見ようとする⁵⁷⁾超歴史的思想家シュレーゲルにとって、『創世記』における《神の原言語創出》の瞬間こそが、一切の歴史的限界を突き破り、あの「巨大な断絶」を飛び越えてまでもわが眼に収めたかった《聖ヘブライ語創出》の瞬間だったはずである。そしてこの痛切な越境願望、あるいはむしろ境界消滅幻想が、ヘブライ語にインド・ヨーロッパ語族を直属の下位者として従えつつ最下層の茫漠たるユーラシア言語地域全体に君臨する權威を与える《言語ピラミッド》——ヘブライ原理による全言語統合——の超言語学的基盤である。晩年のシュレーゲルの「キリスト教の独裁者」のごとき独善的態度に、「黙示録、最後の審

53) Indische Untersuchungen 1823 [IV-37]. KA XV-I, S. 104.

54) Philosophie der Geschichte. KA IX, S. 141f.

55) Ebd., S. 148.

56) Ebd., S. 150.

57) Ebd., S. 96f.

判、磁気催眠術、預言といったものの一切合切が奇怪に混じり合った」「精神錯乱」の徴候を見て取ったティークの印象⁵⁸⁾の是非はともかく、人間言語とその運命についての例えば次のような《流出論的》思弁は、歴史的探索の「アリアドネの糸」を見失ったシュレーゲルの迷路彷徨の一端を伝えている。

「エジプト語の幹音節と神秘的な語根はすべて単音節だったと見てよい。そうした語根の一つ一つから、神からの宿命的な離脱以来の太古世界の不幸の余韻である憂愁に満ちた残響のごときもの〔が聞こえてくる〕。——エジプト語にはこの種の語根がどのくらい存在したか、そしてその数は根源的な象形文字の数に対応するものかどうか探究されねばならないだろう。根源的な自然象形文字はアダムそのものから導き出される。第二の神聖象形文字はセツないしエノクから導き出される。[……] 中国語はたぶん完全に頽廢、墮落したエジプト語にすぎないが、これはスラヴ諸語がきわめて墮落したインド語の方言であるのと同じである。——(黒人の言語のヘブライ語に対する関係も同様である。) たぶんモンゴル語、タタール語、そしてアメリカ原住民の言語はすべてエジプト語圏に属している。[……]——〔バベルの塔の建設〕によってあの精神的諸要素と内的生命の紐帯の崩壊と解体が、そしてまた諸言語の相互理解と精神的洞察の消滅が到来した。(その部分的な復興に寄与したのが使徒たちの言語の才能である。)——しかしバベルの塔の建設自体は疑いもなく本来の異教と完成された占星術的自然崇拝に淵源するものであると解される。(ただしこれは太古の世界の巨人族のもとにおいて明らかに支配的だった悪しき魔法とは区別される。)——人間が生きた神の代わりに自然を崇拝し始めたとき、人間は自然の諸力、自然の諸影響、自然の感情の絶対的(?) 威力の手に落ちた。こうしていまや諸言語は完全に局地的、風土的なものとなり、全体の連関は失われていった。そしてかつての理解の記憶としてのアナロジーのみが、まだ原言語を最も多く保持していた諸言語のうちに残ったのである。——だがこの太古の記憶が完全に抹殺されてしまったその他の諸言語は、模倣的であらわな感情・自然言語の自然原理へと沈下していったのである。」⁵⁹⁾

3

シュレーゲルはその最後の未完の講義『言語と言葉の哲学』の第三講において、前講義『歴史の哲学』での《言語ピラミッド論》の思弁を忘れたかのように歴史的路線に立ち返って見せる。彼はまず「全人類の唯一最初の前言語の、あるいは時を同じくして成立したと見られる複数の祖語の起源」に関する二つの謬見、すなわち単純な自然発生論と素朴な神授論とを共に排除する。人間の言語は、いわば「原泥土」から這いずり出てきたにも等しい存在の形成物に相応しく《自然発生的》であるとする通説は、その起源においてすでに

58) Brief an A. W. Schlegel vom 13. Jan. 1829. Ludwig Tieck und die Brüder Schlegel, hg. von H. Lüdeke. 1930. S. 184. この容赦のない批評は、シュレーゲルの急死を伝える手紙の後半にある。

59) Indische Untersuchungen 1823 [IV-58]. KA XV-I, S. 110f.

「最も美しく組織され」、それゆえ「最古の状態へと遡及すればするほど、いよいよ巧緻を極め、多様な豊かさを増すと共に、最高度に規則的でありながら同時にきわめて単純な形姿を見せる」、あの「最も高貴にして洗練された言語」、すなわちインド・ヨーロッパ語族の存在によって原理的に否定される。この否定はシュレーゲルにとって決定的な軌道修正を意味する。なぜならケルン私講義『世界歴史』によって露骨に表明されて以来の自然言語対神聖言語という二項対立の一項がこの構造そのものを内部崩壊させるからである。人間言語はすべて根源的に自然発生的なものではあり得ない。バスク語、ラップランド語、その他「精神的発展の最低段階に属するかに見える」言語でさえもその「構造全体に見られる稀有な技巧性」によって、また、「きわめて貧弱、かつ、その基盤においてほとんど幼稚なほどに単純で、しかもまったく非文法的な」中国語でさえもその「複雑極まりない独特の文字体系」に縛られた特殊性——「中国の知識人は筆談によって辛うじて意思の疎通をはからざるを得ない」——によって、この命題を裏付けるだろう⁶⁰⁾。

言語起源に関するもう一つの謬見、「言語は神自身がみずから人間に授けたもの」とする「それ自体異論の余地なき」言語神授論に付着する謬見、すなわち「最初の間が樂園で話していた言語」を一切の「派生的諸言語の源泉」と見なし、例えばヘブライ語のうちに「神の言語の痕跡」を突き止め得るとするような臆断には、ここでもまた「われわれをあの原初の起源から隔てる測り知れない断絶的距離」という、これまでこの種の思弁に対する歴史の堡壘として持ち出されてきた概念が繰り返される⁶¹⁾。にもかかわらず「原初の人間」がその「高貴な能力、完全性、尊厳」を喪失する以前に所有していたであろうような言語、「われわれの現在の感覚や器官によってはそのほんの微かな具体的な概念すらもつことのできない」言語について語るシュレーゲルの視線は、すでに歴史的境界の彼方へ漂流し、足はその踏みしめるべき基盤から浮く。そのような言語は、と彼は言う、「永遠の聖霊たちが広大な天空を貫いて自分たちの思想を光の翼に乗せて直接送り合うときに使われる言葉」、「神性の立ち入り難い内部において神性そのものから語り出され、いかなる被造物によっても真似ることのできない言葉」、「一つの深淵がもう一つの深淵に向かって無限の愛と永遠の栄光のまったき充溢を互いに送り交わしている」かのごとき言葉であると。——素朴な神授論は成り立ち得ない。しかし神が最初の間が言語を教えたと伝える『旧約聖書』の素朴な物語には、ある別の、遙かに深い意味が込められている。「神のうちで名付けられ」、「永遠性の刻印を打たれた」事物や生物の名には、これらのものの「最内奥の本質」、「現存在の鍵」、「存在と非存在に対する支配と決定」が含まれているということ、神によって人間に授与され、伝達され、委託された言葉と共に人間は自然の支配者にして王としての、「地上の被造世界における神の代理者」としての地位をも与えられたということがそれである⁶²⁾。

60) Philosophie der Sprache und des Wortes. KA X, S. 359f.

61) Ebd., S. 361.

62) Ebd., S. 361f.

自然言語と神聖言語との質的二元論はもはや存在し得ない。言語は人間にその使命と共に託された神の贈り物として本源的に神祕的起源のものでなければならない。人間言語はすべて神祕的起源をもつ、というより神にその起源をもたない言語は存在し得ない。しかし現存するすべての言語のうちで、この「原初の隠された起源」にまで遡及し得るものは絶無である。それゆえシュレーゲルはこの「原初の隠された起源」との断絶のいわばこちら側での言語の歴史的探索——「さまざまな派生的ないし混成的諸言語の差異を正しく掴み、そのほとんど見渡し難いまでに豊かな人間言語領域の広大な全体を展望し」、「多様に枝分かれた全人間言語の系統図や、時代を経るごとにきわめて巧緻に発展してきた言語形成」、いわば「われわれの眼前に提示された思考する意識の歴史」の「文字で書かれた記憶板」についての「世界歴史的規模」での探索——のためのアリアドネの糸の一端を、人間の歴史的原文語としての「祖語」の概念に結わえつける。そしてこのような地上の経験学としての言語研究の方法をシュレーゲルは、地球の考古学ともいうべき「地質学」のそれに倣い、河川の流れによって形成され、石灰や粘土、砕かれた骨や貝殻、あるいは古い海底などの多様な諸層からなる「堆積岩」と花崗岩等の「原成岩」との区別を言語の分類にも適用し、派生的な混成的集合言語を新しい地層形成期に成立した「堆積岩」に、これら派生的諸言語の「祖語」と呼ばれ得る原文語を「原成岩」に擬している。むろんこの「原成岩」をもって地球の内実ないし中核であるとは断言できないように、「祖語」の概念をもってあの「一切の言語の隠された原初の起源」への遡及の可能性を許容するがごとき——例えばかつて「サンスクリットに関してそうだった」ように——地上の他の一切の言語の普遍的祖語、その最初の源泉にして母語であると主張することはできない⁶³⁾。

言語神授論と地上の経験学としての言語起源論とは峻別されねばならない。この二元論を不可避の前提としつつシュレーゲルは諸言語の歴史的起源の探究に踏み込み、祖語の複数存在説、すなわち最古の時代の最初の言語創出期における複数の原種族の数と発展段階に対応した言語起源の諸時期が存在したとする仮説を立て、この見地から、「インド語がその最古にして最も完成された言語として第一等の地位を占める」語族、インド・ヨーロッパ語族を「最も確実かつ最も知られた」語族として挙げ、これらの諸語をもって「その最古の言語様式の始原的状态において極度に精巧な構造と美しい文法的構成と秩序」、「最高にして最も高貴な詩的造形およびこれに続く同様に細心の学問的明確性」によって他に懸絶した言語群としながらも、しかしこの一大語族でさえ、「その発展度においても言語の完成度においても格段に低次の段階」にとどまっている諸言語、諸語族をも網羅する地上の全言語体系の一部を成すにすぎないと結論づける。そして別種の祖語に属するタール系諸語、アフリカ系諸語と共に「最低のクラス」に位置するアメリカ原住民の諸言語を特に取り上げ、これら諸民族の際立った特徴の一つとして、高貴な「始原状態」から非常に深く下落してしまった「人間の精神能力の退化」を挙げ、この種族の言語を「ある巨大な廃墟の、ある途方もない破壊の悲しげな残滓」と形容した「アメリカの諸民族と諸言語の最

63) Ebd., S. 362ff.

大の精通者」アレクサンダー・フォン・フンボルトの見解に賛同しつつ、この流出論的な「深い下落の悲哀感」のうちに、「その物質的構成要素」にまみれて互いにほとんどいかなる「類似性」も見出せぬまま「無限の多様性へと分裂」していったこれら最下層言語の共通の運命を見ようとする⁶⁴⁾。

ここでもまたシュレーゲルにとってヘブライ語の処遇が難所となる。そしてここでもまたシュレーゲルは「預言的言語」と呼ぶに相応しいヘブライ語の「深い含蓄性と簡潔性」、「比喩的表現の大胆さと熱狂的性格」を反復強調し⁶⁵⁾、太古の言語創出期におけるヘブライ語の特殊な地位についても、「エジプトの象形言語」の「優美な技法」、「中国語の文字体系」の「複雑な技巧性」を第一段階、インド系諸語の「美しい形式と完全な構造」をもってする「詩的精神の最初の飛翔」、最初期のラテン語の断片に見られる「祭司的厳肅さ」をその第二段階とする「太古の言語発展史」の最終段階にヘブライ語の「大胆な宗教的熱狂」の「高次の尊厳」を君臨させる⁶⁶⁾ことによって、彼の《言語ピラミッド》の正当性を再確認している。しかしヘブライ語の《孤高性》はともかく、その《孤立性》は覆うべくもない。ここでもまたシュレーゲルは、ヘブライ語とインド・ヨーロッパ諸語との覆い隠された「内的類縁性」の発見への期待を将来の研究に託するほかはない⁶⁷⁾。

シュレーゲル最後の講義『言語と言葉の哲学』第三講の主要部を成すこの言語論を歴史的・実証的な《言語起源論》と見る限り、それはここでもまた超越的・超歴史的なものの干渉による挫折と徒勞の過程である。「言語体系全体ないし全言語世界は、意識と内的思考能力との外的に可視的となった姿であり忠実な鏡像であり、最古の言語創出におけるさまざまな諸時期は人間精神の発展過程におけるまさに同じ数の諸段階を形成する。そしてあらゆる民族をその年代に従って互いに結びつける想起と伝承の糸としての言語一般は、いわば全人類の共通の記憶と偉大な想起器官である」⁶⁸⁾と語るシュレーゲルは、言語一般を「ある国民から他の国民へと生きつづけてゆく伝承の貯蔵庫、ある世紀を他の世紀に結びつける想起と精神的連関の糸」と呼びながら、にもかかわらず「原初の言語創出」の瞬間については、この創出を「個々の言語的要素」の「断片的、アトム論的合成」ではなく、「真の詩的ないし芸術的生産と同様」の「全体からの一挙の、無媒介的成立」⁶⁹⁾と断定せざるを得ない。なぜならそれはまさに一つの啓示として、あるいは啓示と共に与えられたいわば《神授の完璧》の顕現だからである。地上の全言語はその歴史的生成と発展——これを否定することは不可能である——のすべてを挙げて超歴史的所与として、まさしく根源的啓示として、「無媒介的」に一瞬にして現前したのである。この本源的所与性は、一切の歴史的遡及の彼岸に、この歴史的遡及の根拠でありながら、しかもこの根拠を究極におい

64) Ebd., S. 369f.

65) Ebd., S. 372.

66) Ebd., S. 373.

67) Ebd., S. 371.

68) Ebd., S. 372.

69) Ebd., S. 374.

て拒む《超歴史的君臨》として、人知の到達し得ない遙かな非時間の彼方にある、いや、彼方そのものである。そしてこの《彼方》はその存在において完璧であるがゆえに、一切の歴史的発展はそこからの下落、完璧性からの不完全性への流出論的脱落の無限過程以外の何ものでもないことを、そこへの到達を夢見る者たちに悟らせるのである。シュレーゲルは言う、「あの近寄るすべもなく覆い隠された起源とわれわれとを隔てる暗黒の空間ないし巨大な断裂のこちら側で、最古の言語創出の第一段階は深い頽落性そのものと、それへの悲哀の感情とによって特徴づけられる」⁷⁰⁾と。——あの《言語ピラミッド》でさえ、「断裂のこちら側」でのいわばバベルの塔として、「頽落性への悲哀」の記念碑にほかならず、発展の第一段階がすでに流出論的下落の発端である限りにおいて、この発展の最高段階に位置するヘブライ語こそまさにこの下落の最悪の極致を意味するだろうというパラドックスのうちに漂う樓閣である。その限りにおいてシュレーゲルの言語起源論の最終答案は、地上的言語の此岸から神的言語の彼岸へと虚しく両腕を差し伸べた有限的存在者の、無限の神性からの脱落の悲嘆そのものの確認である。そしてこの腕によって差し出された現実の答案は、全ヨーロッパがインド学においてもエジプト学においてもシナ学においてもヨーロッパ流儀のいわば略奪的学習期にあった19世紀初頭、インド・ヨーロッパ語族の発見という衝撃的事件に巻き込まれた東洋幻想の一記録として、このいまだ決着を見ない言語起源論争にはなんら実効的に寄与することなく——『インド人の言語と叡知』は「この労作によって触発されたこの専門領域のその後の学問的諸業績によってほどなく凌駕された。その後それはただ折りに触れて歴史的事実として言及されたにすぎない」⁷¹⁾——、《言語ピラミッド》という図柄一枚のほかは、思弁と幻想の交差する奇妙な《象形文字》で埋まった一種独特の白紙答案に終わった。

*

『インド人の言語と叡知』の刊行がシュレーゲルのカトリックへの《回心》と重なったことが、この《作品》の立場を微妙なものにしている。『フリードリヒ・シュレーゲル原典批判全集』の編集主幹エルンスト・ベラーは、シュレーゲルの《回心》を、そこにこそ「根源宗教の痕跡」を見出し得ると信じたインド世界に「一神教」からの「汎神論、二元論」への、「占星術的迷信、輪廻、流出体系」への変質のみを見出して失望したシュレーゲルの「ユダヤ・キリスト教的伝承」⁷²⁾への最終的回帰と見る。また、同全集版のインド関係担当者として『インド人の言語と叡知』に付された翻訳諸断片を初めてそれらの底本となった原典と照合・検証し、また遺稿の『東洋学研究ノート』全六冊の校訂・編纂者の役割をも

70) Ebd., S. 373.

71) Ursula Struc: Zu Friedrich Schlegels orientalischen Studien. In: Z.f. Deutsche Philologie, 1969, S. 114.

72) Ernst Behler: Das Indienbild der deutschen Romantik. In: Germanisch = romanische Monatschrift, 1968, S. 28.

担ったウルズラ・シュトルク=オッペンベルクも、さすがにシュレーゲルのインドからの撤退と《回心》とをこの東方世界への「知的冒険」の果ての失望に帰するという単純反転説には同調しない⁷³⁾ものの、シュレーゲルの「非キリスト教的諸宗教への哲学的関心」が本来「モーセの啓示」に淵源し、根底において「カトリック神学に規定されていた」⁷⁴⁾と捉え、彼の《回心》を「異教の諸宗教の支配する異質な文化領域への長途の遠征」からの「キリスト教的神学への帰還」⁷⁵⁾と見ることで、ベラーの編集理念に合流している。にもかかわらずベラーも、そしてまたオッペンベルクも、カトリック思想家シュレーゲルが現実のカトリック教会の教義に順応し得たかという点では否定的であり、ベラーはシュレーゲルの『後期哲学の諸原理』について述べた解説で、シュレーゲルは「教會的な意味でカトリックだったためしはなく、むしろ教会に対立する異端者と呼ばれるべき立場に立っていた」とするフリードリヒ・フォン・ラウマーや、シュレーゲルは「学問にも芸術にも、さらには信仰にも、そしてキリスト教にさえも満足を見出さなかった」とするティークの証言を引用したあと、シュレーゲルの遺稿『哲学と神学のための研究ノート』（散逸）を読んだ兄のアウグスト・ヴィルヘルムがウィンディッシュマン宛の手紙でその読後感を、神学愛好家だった6世紀のフランク王ヒルペリヒが三位一体に関するラテン語の論文を書き、自信満々並居る司教たちに読み聞かせたとき、一人の血気の司教が王の手から原稿を奪い取り、燃えさかる暖炉へ投げ込んだという逸話に託したというくだりを紹介し⁷⁶⁾、オッペンベルクもこの同じ箇所を引証している⁷⁷⁾

このアウグスト・ヴィルヘルムの反応はアジアへの「長途の遠征」から帰り損ねた、あるいは帰る場所を間違えたシュレーゲルのカリカチュアを提供するかに見える。因みに、アンステットは「キリスト教的心霊主義」⁷⁸⁾を、オッペンベルクは「キリスト教のカバラ主義」⁷⁹⁾を帰還後の彼の仮住まいの一つに指定している。しかしそもそも彼は本当に帰還したのだろうかと問うてみるのが、オリエント探検旅行におけるシュレーゲルの最終位置確認のために必要な設問でなければなるまい。なぜなら後期三講義の一つ、1828年の『歴史の哲学』の第四講でインド人の神話と哲学に言及するときの彼の論調は、インド神話の根底にキリスト教と同質の神性原理を見出して熱狂した1803年のパリ私講義『ヨーロッパ文学の歴史』の論調と四半世紀の時空を越えて合致するからである。彼はパリ私講義におけると同様⁸⁰⁾、インド神話をギリシャ神話と対比させ、ギリシャ神話に欠落している「神性概念」、すなわち「可視的自然を越えて存在する無限の精神」の概念が、さらには「至高

73) *Orientalia*. KA XV-1, S. XVI.

74) *Ebd.*, S. XXXVII.

75) *Ebd.*, S. XXXIX.

76) Ernst Behler: KA VIII, S. CLIf.

77) *Orientalia*. KA XV-1, S. XLI.

78) Jean-Jacques Anstett: *Mystisches und Okkultistisches in Friedrich Schlegels spätem Denken und Glauben*. S. 149.

79) *Orientalia*. KA XV-1, S. XLf.

80) KA XI, S. 24ff.

の存在者とその諸性質と諸関係」についての「最も厳密な形而上学的概念」までが、ギリシャ人より遙かに「熱狂的な官能的自然崇拜」と「奇怪なアニミズム」に囚われていたインド人の神話に見出されること⁸¹⁾をこの神話の驚嘆すべき特質として挙げ、このような「至高の真理」と「感性的誤謬」との、「最も抽象的な形而上学的神学、最も純粋な自然的神学」と「最も粗野で荒唐無稽な虚構」との共存⁸²⁾によって醸成された深い意識と信念——人間の神的存在からの無限の脱落と疎隔の意識と、「地上の穢れ」との無限の苦闘に耐えて再び神的存在との合一を果たさねばならないとする信念——から、至高の存在者の「測り難い深淵」の中へ全霊を没入させ、「虚妄の現世における生存形態」を幾たびも身に纏わねばならない「変態と遍歴」からの脱却を目指す⁸³⁾輪廻の教説に、インド哲学諸派共通の究極目的を見、そして「神性との最も緊密かつ永遠の合一」のためには時としてほとんど「自己破壊」とさえ呼び得るほどの極限にまで徹底するインド人のこの実践哲学に近世ヨーロッパの神秘主義を重ね合わせるのである⁸⁴⁾。

このいわばインドから放たれる視線は、この講義に続く彼の最後の講義『言語と言葉の哲学』の第九講——彼が生きて聴講者に語ることできた最後の機会となった——の、例えば次のような記述においてさらに《より深く東方》へと引き退いたものとなる。すなわち「一切を魔術的に引き浚い、世界を押し包む大海原のように人類と自然のすべての時間のまわりを、永遠に変化しつづける波の戯れとなって巡り流れる」、「一切の他の詩文学の源泉」としての「最古の時代の叙事詩的歌謡における古き永遠の想起の漫々たる源流」についての論述⁸⁵⁾に続く「古代神話世界の根源」に言及される箇所での一節、「太古の世界の最初の人間たちと偉大な聖者たちの単純な宗教——というのも真の宗教は根源的にはただ一つしかなかっただろうから——をキリスト教と呼ぶことが許されるならば、次のように言うこともできるし、許されもするだろう。すなわち一本の糸がキリスト教と真の神認識からあらゆる異教とそのさまざまな密儀をうねうねと貫き通っているのをいまお明瞭に見て取れると。そのように人間精神の不可思議に錯綜した道程をその多様な発展に沿ってたどりつつ、真理のあらゆる側面、そのさまざまな視点や見解に照らしながら、千変万化する幾多の表現を通して、より一層深く理解し、生き生きと実感できるようにすることこそ望ましいと言えるだろう」⁸⁶⁾という一節は、われわれに「インドへの長途の遠征」から帰還してカトリックの僧衣を纏いつつ遙かな東方への憧憬を語るシュレーゲルよりは、むしろ帰路を見失って異教世界を放浪しつつ遙かなキリスト教世界への望郷幻想に浸るシュレーゲルを想像させる。そのシュレーゲルの原言語探究の視線は、「ある根源的で模倣し難いもの」、「いかなる変形を加えられたのちにもなお太古の本性と力とを仄かに輝き出させ

81) KA IX, S. 97ff.

82) Ebd., S. 98.

83) Ebd., S. 102.

84) Ebd., S. 104f.

85) KA X, S. 506f.

86) Ebd., S. 510.

ているもの」として「一切の詩の永遠の源泉」——それは彼にとってまさにインドにこそ由来するものだった——となるべき神話の根本概念を模索した1800年の『神話についての講演』⁸⁷⁾以来の原世界希求の最後の一瞥として、「インド語、ヘブライ語、エジプト語、中国語」という「失われた原言語の覆い隠された源泉に最も近く位置する四つの大河」をさらに合わせ吞む、例えば《ユーラシア語族》とも言うべき定かならぬ《原郷》へと漂ってゆくかのようである。

Zwischen dem indischen und dem hebräischen Prinzip

—— zu Friedrich Schlegels Theorie vom Ursprung der Sprache ——

SAKATA Kenichi

Im Herbst 1803, als er sich in Paris mit dem Studium des Sanskrit beschäftigte, schrieb Friedrich Schlegel an Ludwig Tieck: „Hier ist eigentlich die Quelle aller Sprachen, aller Gedanken, und Gedichte des menschlichen Geistes; alles, alles stammt aus Indien ohne Ausnahme.“ Der Ausbruch dieser Indienbegeisterung war freilich vorbereitet durch seine damals wachsende Zuneigung zur mosaïschen Überlieferung. So hat er in den zwei Monate nach diesem Brief an Tieck begonnenen Pariser Privatvorlesungen über die *Geschichte der europäischen Literatur* monotheistische Grundzüge in der indischen polytheistischen Mythologie gesehen: in der Hauptgottheit Brahma das Bild eines allmächtigen Vaters und in der indischen Trinität(Brahma-Vishunu-Siva) sogar eine Ähnlichkeit mit dem christlichen Dogma vom dreieinigen Gott. Jetzt platziert er in der epochalen Schrift der Indolomanie, *Über die Sprache und Weisheit der Indier*, die 1808, eben im Jahr seiner Konversion zur katholischen Kirche, erschien, das Alte Testament als „das eigentliche Band“, „wodurch auch die europäische Denkart und Bildung an das orientalische Altertum sich knüpf[e]“, und erklärt die indischen Religionssysteme zum „schönste[n] und lehrreichste[n] äußere[n] Kommentar der heiligen Schrift“.

Diese jüdisch-christliche Interpretation der indischen mythisch-religiösen Urwelt oder besser: die Subsumtion derselben unter die mosaïsche Offenbarung — „Ohne Moses wäre alle orientalische Kenntniß nur das alte Urgewässer, auf dem der Geist Gottes nicht schwebt [...]“(1810/12, KA XIX, S. 302)“ — sollte auch in *Vom Ursprung der Sprachen* ein Übergewicht theologischer Spekulation über die historische Untersuchung mit sich bringen. Auf seiner durch die 1786 von William Jones entdeckte Verwandtschaft des Sanskrit mit den europäischen Sprachen angeregten Expedition nach dem „Urland“ der „Ursprache“ eines „Urvolks“ legt Schlegel sich hier schon zu Beginn die

87) Rede über die Mythologie. KA II, S. 319 / S. 312.

Fessel des Dualismus „göttliche Sprache“/„bloß menschliche Sprache“ an (*Universalgeschichte* 1805/6). Die erstere sei die „ursprünglich schöne Sprache“, die sich den ältesten Menschen als das „einer unendlichen Entwicklung fähige, kunstvolle und doch einfache Gebilde“ nicht „allmählich, sondern mit einemale“, wie eine Offenbarung, habe mitteilen lassen. Die Gruppe dieser Sprachen sozusagen göttlichen Ursprungs bildeten nach ihm die „edlen“ indo-europäischen Sprachen, die ausnahmslos im „alten Sanskrit“ ihre „gemeinschaftliche Mutter“ hätten. Die andere, die natürliche, erdgebundene Sprache scheine dagegen aus „mancherlei Schallnachahmungen und Schallspielen, dem bloßen Geschrei des Gefühls“ und aus „den endeiktischen Ausrufungen oder Interjektionen der Hinweisung und Verdeutlichung“ entstanden zu sein. Unter die „große bis jetzt noch nicht völlig bestimmbare Menge“ der Sprachen dieser Art, die mit der indo-europäischen Sprachfamilie „durchaus keine wesentliche Verwandtschaft“ habe, zählt Schlegel alle die „übrigen nord- und südasiatischen oder amerikanischen Sprachen“. So stehe z.B. das Chinesische, die Sprache einer „sonst so verfeinerten Nation“, „auf der untersten Stufe“ in der Hierarchie der Sprachen der Menschheit, ebenso wie andere asiatische Sprachgruppen „des tatarischen, finnischen, mongolischen und tungusischen oder Mantchou-Stammes“.

Nach dieser drastischen Zweiteilung aller Sprachen müßten die arabische und die hebräische, die für Schlegel doch ebenso von göttlichem Ursprung waren, ganz isoliert da stehen; denn der semitischen Sprachfamilie würde die Angehörigkeit zur indo-europäischen sprachwissenschaftlich verweigert. Um diese Sackgasse zu vermeiden, greift Schlegel zu der ebenso merkwürdigen, sprachwissenschaftlich ebenso unbegründbaren Hypothese von einer „allgemeinen Sprachenpyramide“, die „das Ganze aller, über die bewohnbare Erde verbreiteten Menschendialekte“ und aller „verschiedenen Redeweisen“ umfassen sollte (*Philosophie der Geschichte*, 1828). Diese Pyramide bestehe aus „drei Stufen“. Ihre Basis bildeten all jene Sprachen des natürlichen Ursprungs, die „größtenteils nur einsilbige Wurzellaute“ kannten, die entweder „ohne alle Grammatik, wie die chinesische Sprache“ seien oder doch nur versehen „mit den rohesten Anfängen und ersten Grundzügen einer äußerst einfachen und unvollkommenen grammatischen Struktur“. Die nächstfolgende Stufe nähmen „die edelsten“ Sprachen ein, eben die indo-europäischen, in denen die Wurzeln, die „größtenteils wenigstens zweisilbig“ seien und dadurch „innerlich beweglich“ und „lebendig und produktiv“ gemacht, zu einer „sehr reichen grammatischen Entfaltung“ Raum und Anlaß gäben. Die dritte und letzte Stufe, also „die Spitze jener ganzen Pyramide“ bildeten die semitischen Sprachen, d.h. die hebräische und die arabische, in denen alle Wurzeln „dreisilbig“ seien. Der vorherrschende Charakter dieser Sprachen, v.a. der der hebräischen, in der „die höhere geistige Bestimmung der Hebräer“ zum Ausdruck komme, bestehe darin, daß sie für die „prophetische Begeisterung“ und eine „tiefe symbolische Bedeutsamkeit“ besonders geeignet seien.

Plötzlich aber läßt er den Faden dieser Spekulation liegen und gesteht, daß der Boden, aus dem alle anderen Sprachen hervorgegangen seien, die „Ursprache“ des „ersten von Gott erschaffenen Menschen“, die Sprache, die „Gott selbst ihn gelehrt“

habe, „weder die hebräische, noch die indische, noch sonst irgendeine der jetzt vorhandenen und uns bekannten“ gewesen sein könne, „so wenig als irgend jemand die verlorne eine Quelle des Paradieses, aus welcher die vier Ströme ihren Ursprung nahmen, [...] imstande sein [werde], geographisch nachzuweisen, und von neuem zu eröffnen“ (Hinweis auf die Genesis).

Aber wohin eigentlich wirft er nach seiner langen Forschungsreise durch die eurasischen Sprachländer seinen sehnsuchtsvollen Blick über die Grenze der irdischen Sprachen, wenn er, als hätte die genannten Hypothesen völlig aus dem Blick verloren, in seinen *Fragmenten zur Geschichte und Politik* (III, 1828) folgendes schreibt: „Unter den vorhandenen Sprachen sind vielleicht die indische (als die älteste in ihrer Familie), die hebräische, die aegyptische und die chinesische (als wo die ältesten Schriftdenkmahle vorhanden sind) als die vier Ströme zu betrachten, welche der verborgenen Quelle der verlohrnen Ursprache am nächsten liegen.“